

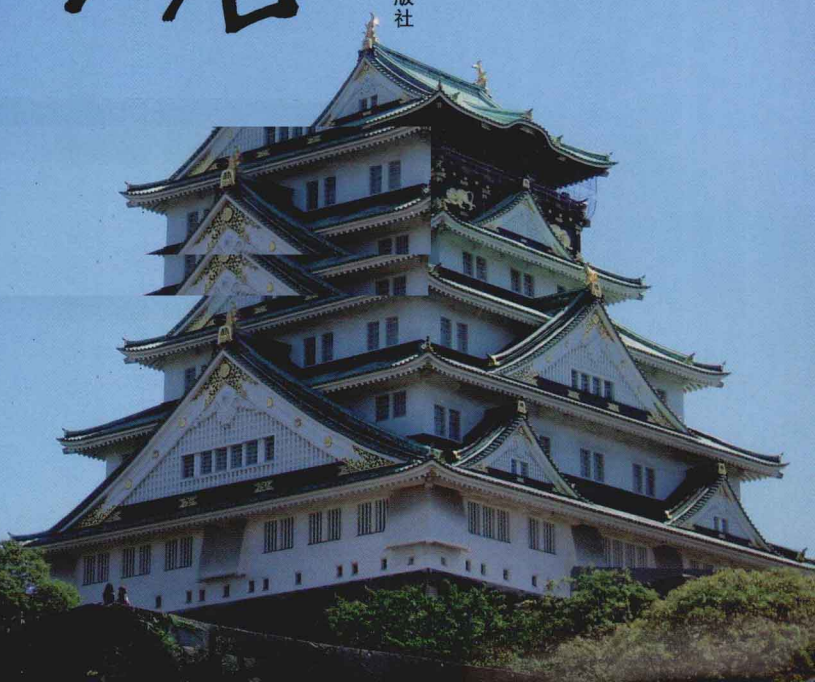


日本概况

日本事情

焦毓芳 张建华 吴红敏 / 编著

◎ 华东理工大学出版社



日本概况

日本事情

焦毓芳

张建华

吴红敏 / 编著

◎ 华东理工大学出版社

图书在版编目(CIP)数据

日本概况/焦毓芳,张建华,吴红敏编著. —上海:华东理工大学出版社,2011.6
ISBN 978-7-5628-3040-5

I.日... II.①焦...②张...③吴... III.①日语-汉语-对照读物②日本-概况
IV.H369.4;K

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2011)第 084584 号

日本概况

编 著 / 焦毓芳 张建华 吴红敏

责任编辑 / 王 娟

责任校对 / 金慧娟

封面设计 / 戚亮轩

出版发行 / 华东理工大学出版社

地 址:上海市梅陇路 130 号,200237

电 话:(021)64250306(营销部)

(021)64250787(编辑室)

传 真:(021)64252707

网 址:press.ecust.edu.cn

印 刷 / 常熟市华顺印刷有限公司印刷

开 本 / 710mm×1000mm 1/16

印 张 / 18.75

字 数 / 428 千字

版 次 / 2011 年 6 月第 1 版

印 次 / 2011 年 6 月第 1 次

印 数 / 1—5000 册

书 号 / ISBN 978-7-5628-3040-5/H·1104

定 价 / 35.00 元

(本书如有印装质量问题,请到出版社营销部调换。)

如您对本书有任何建议,请联系:835099400@qq.com

まえがき

中国と日本は一衣帯水の隣国であり、両国間の友好交流はすでに2000年の歴史を持っている。21世紀初頭の現在、中国と日本はお互いに最大の貿易相手国となっている。

こうした中、中国では、日本語を学ぶ人の数が着実に増加し、いまや、日本語は英語に次いで第2位の学習者がいる外国語となった。

外国語を勉強するためには、言葉だけではなく、その言葉が使われている国の歴史と文化等をも勉強する必要がある。本書は、こうした要請に答えるべくこれまで著者が数年にわたり上海外国語大学等において行ってきた「日本事情」の講義ノートをもとめたものである。

これまで優れた日本事情の教科書が数多く出版されている。それにもかかわらず、本書が何がしかの存在意義と特徴をもつとすれば、それは以下のような点であろう。

第一に、対象とする読者の範囲を可能な限り広くしたことである。日本語を学ぶ学部生のみならず、短大生、社会人学習者にも適した本となるよう配慮した。

第二に、内容を可能な限り広くしたことである。日本事情の教科書として、日本の地理、歴史、文化と文学だけではなく、日本の政治、経済、外交と防衛等も簡単ながら紹介した。

最後に、本書の使用者が中国人学習者であることに配慮し、中国と日本との関係を最後の第十二章にまとめたことである。中日の文化交流、中日貿易と貿易摩擦、中日間の衝突と戦後の中日外交関係等についても紹介している。

教科書の常として本書は、これまでに出版された教科書、百科事典等に多くを負っている。

本書は3人の著者の完全な共同作業の結果出来上がった。3人がそれぞれ書きためた原稿をもとに、何度も原稿を読み合い、原形をとどめないほどの加筆、修正を繰り返した。したがって、記述に誤りがあるとすれば、3人の責任である。

また、本書が成立するにあたり数多くの方からご指導、ご支援を頂いた。ルビの一部は、上海外国語大学大学院生尚磊氏につけて頂いた。ここに記して感謝の意を表したい。

最後に、本書の完成は最初の締切から大きく遅れ、華東理工大学出版社の陳勤氏に多大なご迷惑をおかけした事を陳謝すると共に感謝の意を表したい。氏の粘り強い励ましがなければ本書が世に送り出されることがなかったであろう。また、氏には細かい校正にまで目を配って頂いた。

なお残る、不正確な記述、わかりづらい点などについては学生との対話を通じて改善していきたいと考えている。

焦 毓芳

張 建華

吳 紅敏

2011 年 5 月吉日

目 次

第一部 地理・歴史

第一章 国土と住民	2
第一節 国土と気候	2
第二節 資源	8
第三節 住民と宗教	10
第四節 交通	13
第二章 日本の各地方	15
第一節 北海道	15
第二節 東北地方	17
第三節 関東地方	20
第四節 中部地方	23
第五節 近畿地方	25
第六節 中国・四国地方	28
第七節 九州地方	31
第三章 原始・古代	36
第一節 旧石器・縄文・弥生・古墳時代	36
第二節 飛鳥時代(6世紀末—8世紀初)	38
第三節 奈良時代(710—794年)	40
第四節 平安時代(794—1192年)	42
第四章 中世	46
第一節 鎌倉時代(1192—1333年)	46
第二節 室町時代(1338—1573年)	49
第五章 近世	54
第一節 織田信長・豊臣秀吉の統一事業	54
第二節 徳川政権(1603—1868年)	59
第三節 開国と江戸幕府の倒壊	64

第六章 近代	67
第一節 明治時代(1868—1912年)の始まり	67
第二節 日清(甲午)戦争と日露戦争	71
第三節 明治後期と大正時代(1912—1926年)	75
第四節 激動の昭和期(1926—1989年)	78
第七章 現代	82
第一節 戦後の改革と経済復興	82
第二節 高度経済成長期	87
第三節 安定成長期	90
第四節 平成大不況	93
第八章 日本の文化と文学	97
第一節 伝統文化	97
第二節 現代文化	102
第三節 近現代の文学	107

第二部 現代日本

第九章 日本の政治と政党	112
第一節 国体と国会	112
第二節 日本の行政制度	115
第三節 日本の司法制度	121
第四節 日本の政党	122
第十章 日本の経済と貿易	127
第一節 経済と戦後の景気循環	127
第二節 産業構造	131
第三節 貿易と貿易摩擦	137
第十一章 戦後の外交と防衛	142
第一節 戦後の外交	142
第二節 日本の防衛	150
第十二章 中日関係	154
第一節 中日の文化交流	154
第二節 中日貿易	158

第三節 中日間に起きた衝突	162
第四節 戦後の中日外交関係	168
問題	176
付録一	
1. 日本大事年表	180
2. 中国と日本の友好都市一覧	188
3. 日本の戦後の総理大臣一覧	196
4. 日本のノーベル賞受賞者一覧	198
付録二	
中国語訳文	199

第一部 地理・歴史

第一章 国土と住民

第一節 国土と気候

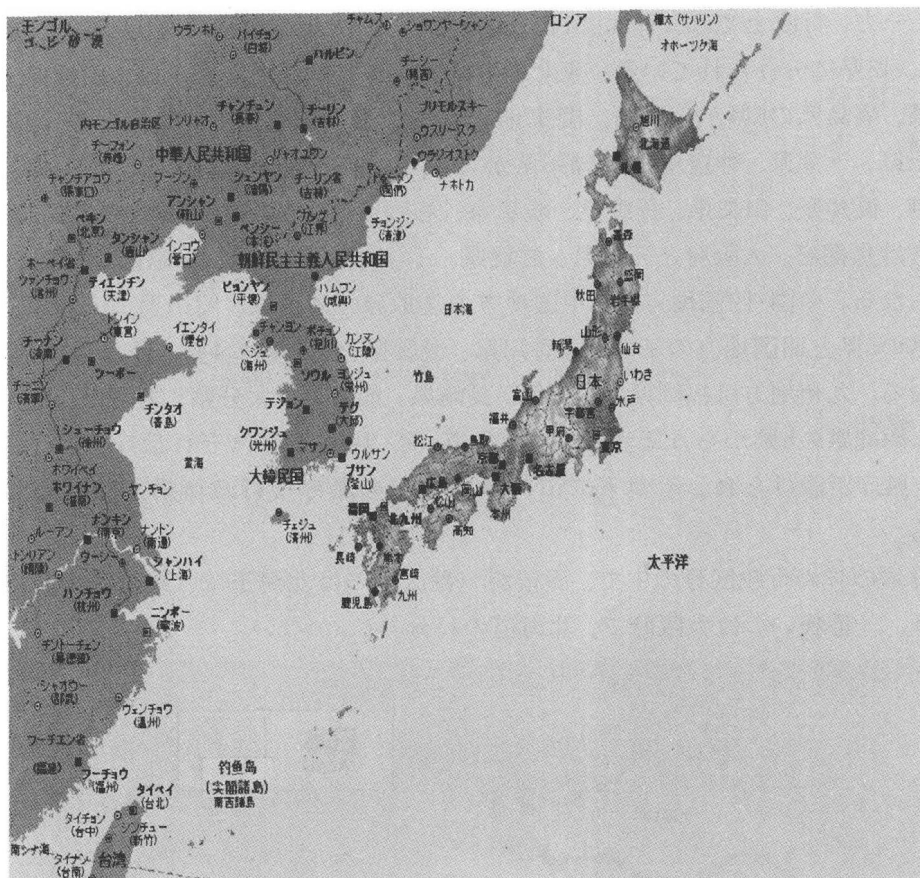
1 日本の位置と領域

日本はユーラシア大陸の東側にある、北東から南西に弓形に伸びる列島である。北と西はオホーツク海、日本海、東海(東シナ海)によって大陸から隔てられ、南と東は太平洋に面している。国境が隣接する国家は主に、オホーツク海と日本海を挟んで北にロシア連邦(ロシア)、西に日本海または対馬海峡を挟んで朝鮮半島の朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)と大韓民国(韓国)、そして東海を挟んで中華人民共和国(中国)がある。特に中国や朝鮮半島の国々と日本は古くから政治・経済・文化など様々な面で深い関係を持っている。

日本は北海道、本州、四国、九州の4島と、北方領土の島々、小笠原諸島・南西諸島をはじめ、大小合わせて約6800もの島々からなっている。北海道から沖縄島までの直線距離は3000km以上で、また関東から南へ約2000kmまでの間に小笠原諸島がある。総面積は約38km²で、世界の陸地のおよそ400分の1にすぎない。日本は1977年に、国土の沿岸から12海里までを領海と定め、200海里までを漁業水域とした。この水域の広さは、国土面積の約10倍にもなる。また、国土の周りの海には水産資源や地下資源の豊富な大陸棚も広がっている。

周囲を海で囲まれている日本には、陸続きの国境はない。北は択捉島、南は沖縄の島々、東は南鳥島、西は与那国島が「国境の島」になる。これらの島々で、日本人が定住しているのは与那国島だけで、沖縄の島々と南鳥島は気候観測上や領海の主張上、重要な地点となっている。

また、択捉島をはじめ、国後島・色丹島・歯舞諸島は北方領土と呼ばれ、第二次世界大戦後はソビエト連邦に占領され、ソビエト連邦が解体した現在も、ロシアがここを支配している。択捉島には現在約2万人のロシア人が住んでいる。



2 日本の地域区分

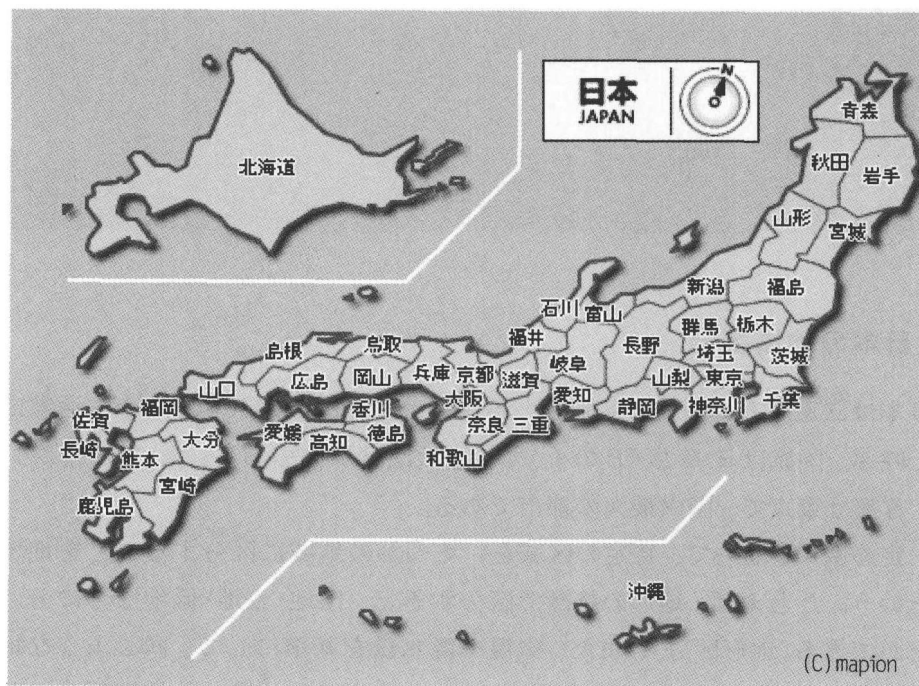
日本は立憲制と象徴天皇制をとる国で、正式国名は日本国だが、通常は日本と呼ぶ。国旗は日章旗(日の丸)で、国歌は君が代である。人口は1億2717万人。首都は東京で、国内最大の都市である。

一定の基準に従って、特定の区域をいくつかの地域に区分することを地域区分という。たとえば、地形の特徴で区分すると、山地・台地・低地などに分けることができる(地形区分)。また、気温や降水量を基準にして、同じような地域ごとに区分することもできる(気候区分)。このように、様々な地域区分のしかたがあり、区分することによって、地域の特徴をよく理解することができる。

日本は地形などの自然的特徴と地域の産業や歴史的変遷を基礎にして、北から北海道、東北、関東、中部、近畿、中国・四国、九州の七つの地方に分けられ

る。一方、行政上では、日本は1都(東京都)、1道(北海道)、2府(大阪府、京都府)、43県に分けられている。東北地方は青森県、秋田県、岩手県、山形県、宮城県、福島県の6県からなる。関東地方は東京都と栃木県、群馬県、茨城県、埼玉県、千葉県、神奈川県、の1都6県からなる。中部地方は新潟県、富山県、石川県、福井県、山梨県、長野県、岐阜県、静岡県、愛知県の9県からなる。近畿地方は京都府、大阪府と三重県、滋賀県、兵庫県、奈良県、和歌山県の2府5県からなる。中国・四国地方は、中国地方の鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県の5県と四国地方の徳島県、香川県、愛媛県、高知県の4県、合わせて9県からなる。九州地方は福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県の8県からなる。日本の都・道・府・県にはそれぞれ都庁、道庁、府庁、県庁が設けられ、その下に市・町・村などの順序で行政機構が設けられている。

日本の47の行政区分の中で、面積が一番広いのは北海道で、東京都の37倍もあり、一番狭いのは大阪府で、北海道の45分の1しかない。



3 平地と山地

日本には大平野はない。盆地と台地を含めても平地は25%前後で、世界有数の山地と丘陵地の多い国と言える。平地の多くは河川堆積物が造った沖積平野だが、関東平野や帯広平野など、台地の多い平野もある。東北地域のほうが西南地域より平地率が高く、特に北海道は、国内では平地の多い所だが、低湿地・湿原が少なくない。

最大の平野は関東平野で、東京をはじめ都市が多い。大阪平野はすでにほとんど都市化した。濃尾平野も都市化が進んだ平野である。石狩平野、仙台平野、越後平野、富山平野、筑紫平野などでは農業が盛んだが、都市化も急速に進んでいる。

国土の75%が山地と丘陵地の日本では、一部の離島を除くと、どこからでも山か丘陵が見える。環太平洋造山帯に属する日本の山地は、現在でも形成中の新しい褶曲山地がほとんどで、断層が至る所に見られ、火山、温泉も多い。

降水量は多く、特に台風や集中豪雨が多いため、山地の侵食活動が活発で、数多くの谷ができています。山地の多くが森林で覆われていること、大高原が少ないことも大きな特色である。

日本の山地は国土のほぼ中央を背骨のように連なって、国土を太平洋側と日本海側とに分けている。本州中央部には、飛騨山脈・木曽山脈・赤石山脈など、3000m前後の高山が「日本の屋根」のように連なってそびえ、ここは日本アルプスと呼ばれている。日本には、このような険しい山地もあれば、北上高地や阿武隈高地のように、なだらかな山地もある。また、富士山や阿蘇山など、広い裾野をもつ火山も多い。世界的に知られる日本の最高峰、富士山は高さ3776mで、山梨県・静岡県の境にある。

4 川と湖

降水量の多い日本列島には川が非常に多いが、大型船が通れる大川はない。太平洋側の河川は夏季には水量が多く、冬季は少ない。台風・梅雨・融雪時に水量が増し、しばしば洪水をおこすため、特に第2次世界大戦後、至る所にダムが造られ、護岸工事が行われた。

国土が狭く、険しい山地が多い日本の川は、長さが短く急流が多く、水力発

電には適している。また硬度が柔らかく、飲料に適するため、水道水に利用されている。

川の長さは上から順に信濃川(367km)、利根川(322km)、石狩川(268km)、流域面積では利根川(16,842km²)、石狩川(14,330km²)、信濃川(12,597km²)の順となる。

湖の多くは火山性で、ほとんどが観光地となっている。平野の湖は、農地や都市のために埋められたところが多い。山地には多数の人造湖が造られ、発電、洪水予防、用水、観光に利用されている。最大の湖は滋賀県の琵琶湖で、670km²の広さをもつ。茨城県の霞ヶ浦が2番目である。北海道の摩周湖はカルデラ湖として知られるだけでなく、バイカル湖と透明度世界一を競っている。秋田県の田沢湖は最大水深が423mあって、日本一を記録している。

5 気候

日本は南北の距離が長く、緯度の差が大きいので、南に行くほど夏が長く、北に行くほど冬が長い。特に一年中気温が高く、降水量も多い南西諸島などは亜熱帯気候と呼ばれる。一方、寒い北海道を亜寒帯気候と呼ぶこともある。沖縄では1月から桜が咲き始めるが、北海道では5月によりやく咲き始める。また、山脈が列島の背骨にあたる部分を縦断しているため、冬には日本海側が世界でも有数の豪雪地帯となるのに対して、太平洋側は乾燥した晴天の日が続く。

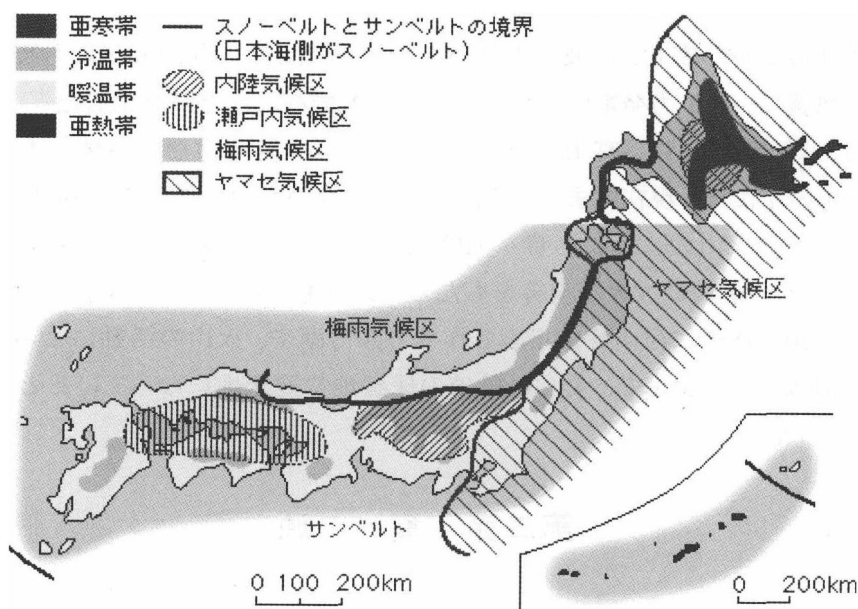
日本の降水量は世界的に見るとかなり多い。1000～3000mmの間にある地域が多く、場所によっては数千ミリ以上に達する。全国の平均は1500mm以上である。降水量の多い時期は、春から夏への変わり目(梅雨)、夏から秋への変わり目(秋雨)、そして冬の積雪期である。また、8月後半から10月にかけて、台風が日本に上陸したり接近したりして、雨をもたらしことも多い。

気温や降水状況に基づいて全国に約四つの気候区が設定できる。

(1)スノーベルト(多雪気候区):日本海側気候とも呼ばれる。冬季に冬型の気圧配置のもと、南西季節風が吹く時には降水が多く、特に厳冬季を中心に大雪となる。また、春や秋などに日本海を発達した低気圧が通過する時にフェーン現象が発生する。(2)サンベルト(多照気候区):太平洋側気候とも呼ばれる。冬季でも日照時間が多く、(1)の地域と対照的。梅雨季を中心に集中豪雨も発

生しやすいが、雨季を除くと晴天が多い。しかし、特に夏季、高気圧圏内に長期間入ると干ばつとなる。(3)内陸気候区：中部地方山間部などは山陰となり降水が少ないが、夏季を中心に、山岳効果により大気が不安定化すると雷雨や降雹が生じやすい。また、気温の日格差、年格差が大きい。(4)瀬戸内気候区：瀬戸内海周辺は山陰となり降水が少なく、日照が多い。海陸風は吹くが風は弱い。夏季は干ばつの危険性が高い。

以上のほか、梅雨季と夏季の気候特性からはさらに次のような特別な気候区もある。梅雨気候区：梅雨は日本の気候を構成する特徴的な現象だが、その明瞭な境界線が津軽海峡にある。ヤマセ気候区：梅雨から夏季にかけてしばしば出現するオホーツク海高気圧から、北日本の太平洋側に流入する冷湿な気流をヤマセという。曇雨天、霧、低温を伴い、冷害の原因となる。



6 地震と火山

環太平洋造山帯に属する日本列島は、山がちで、火山活動や地震活動が活発なため、地質学的に見て土地は不安定である。

日本列島の東沖合には、太平洋プレートが沈み込む海溝が連続し、特に大型地震が多い。近海で起きた大型地震はよく津波を伴う。1933年の三陸沖地震

では、最大28.7mもの津波を記録した。

日本の歴史上最大の人的被害をもたらした1923年9月1日の関東大震災は、相模湾を震央とするマグニチュード7.9の地震で、東京・横浜では震度6(現行では7)を記録、大火災の発生もあって死者・行方不明者14万2800余人を出した。また1995年1月17日にはマグニチュード7.3、震度7の直下型地震が阪神地区を襲い、6433人の死者・行方不明者と推定10兆円の物的被害をもたらした。これは阪神・淡路大震災である。さらに、2011年3月11日午後14時46分、三陸沖(宮城県の牡鹿半島の東南約130km 付近)の深さ約24kmでマグニチュード9.0の強い地震が発生した。「平成23年東北地方太平洋沖地震」といわれる。これは、日本国内観測史上最大となった。東北地方を中心として大きな被害を出し、関東地方や北海道でも死傷者が出る事態となっている。2万人以上の死者・行方不明者を出している。この地震で、三陸沿岸をはじめとして、北海道から千葉県にかけて大津波が押し寄せ、津波により浸水した面積は延べ約400km²にも及んだ。また、地震で、原子力発電所の損傷による放射能漏れなどが発生した。

一方、日本列島には、富士山をはじめ、浅間山、阿蘇山など各地に火山が多い。火山の中には、現在はまだ活動していないものもあるが、桜島や伊豆諸島の島々の火山のように、時々大噴火を起こして大量の火山灰や溶岩を噴出し、周りの地域に大きな被害をもたらす火山もある。しかし一方では、火山から流れ出た溶岩に河がせき止められてできた湖や、火山の活動によって湧き出した温泉などがあって、美しい風景の保養地や観光地になっているところも少なくない。

第二節 資源

7 森林資源

日本の気候は温暖で、雨が多く、樹木がよく育つ。また、山地が多いため、山地や丘陵地帯はほぼ森林となっている。そのため国内の面積に占める森林の割合は約3分の2の2510万ヘクタールと極めて高い。その58%は私有林で、そのほかは国有林と公有林である。南の地方では、しい・かしなどの照葉樹(常緑広葉樹)の林が見られ、北に移るにつれて、ぶな・ならなどの落葉広葉樹の林に変わり、さらに北海道では、まつ・すぎなどの針葉樹の林が発達する。高い山地

では、ふもとから山頂に向かって、これに似た変化が見られる。

木造家屋が多く、パルプ産業の盛んな日本は木材需要が大きい^{ばっさいりょう}が、伐採量は高度成長期以後大きく減少してきた。その原因は、安い輸入材の増加、山地林での人手不足などである。結果として、世界でも珍しく、森林面積がほとんど変化しない国となった。

8 鉱産資源

日本にはダイヤモンド以外のほとんどの^{こうさん}鉱産資源があるが、一部を除いて産出量は少ない^{さいくつ}か、採掘されていない。石炭^{せきたん}も、現在はほとんど輸入に頼っている^{ゆにゆういぜんど}（輸入依存度は約94%）。

日本の^{こうざう}鉱業の中心を占めるのはイオウ、ヨウ素である。イオウは世界第5位320万トン、ヨウ素は世界第2位6500トンを採掘している。産出量では、天然ガスや石炭が目立つ。少量ながら^{げんゆ}原油をも産出する（需要量の99%が輸入を頼りにしている）。

金属資源は^{あえん}亜鉛、^{なまり}鉛、^{どう}銅を産する。この3金属は^{ひつてんぞく}非鉄金属として非常に重要である。しかしながら、いずれも国内消費量の4%、6.8%、0.02%しかまかなえていない。金、銀も採掘されているが、世界的にはシェア0.5%以下である。

国内需要をまかなうだけの生産量がある地下資源は石灰岩（セメント原料）、^{けいせき すいしょう}珪石（水晶、ガラス・レンズ・光ファイバー・建築材料の原料）などごく少数である。

日本列島の地下資源は概して全体としての産出量は少ないものの、^{まいぞう}埋蔵されている鉱物の種類は非常に豊富で俗に「^{まいぞう}鉱物の博物館」と呼ばれる。

9 漁業資源

日本は島国で、^{かいがんせん}海岸線の出入りが多く、総延長は33889kmにも及び、世界有数の長さである。日本近海は^{だんりゅう}暖流と^{かんりゅう}寒流が交わり、魚の餌となるプランクトンが発生しやすい。それで、日本は漁業資源に恵まれていて、昔から漁業が盛んであった。

暖流は太平洋を南から北へ流れる暖かい海水の流れで、海の色が青黒く見えるので、^{くろしお}黒潮と呼ばれる。カツオやマグロはこの黒潮に乗って日本の近海へく